

## 「もうひとつのこの世」の実現を目指して 水俣の哲学(上)

小松原織香\*

### 1 はじめに

「もうひとつのこの世」という不思議な言葉がある。私たちが生きている「この世」ではない。死後の世界である「あの世」でもない。生きたまま、白昼夢のように幻視する理想郷。それが、「もうひとつのこの世」である。

この「もうひとつのこの世」こそが、水俣病運動の核にある思想である。水俣での社会運動に触れると、どこからか漂ってくる不思議なスピリチュアリティの源泉だと言っている。

1960年代後半、水俣病運動が大きく盛り上がった。この時代は「政治の季節」とも呼ばれる。世界中で社会運動が活発化した。多くの人々が自らの思想に基づいて、政治活動へ身を投じた。

「政治の季節」の一つの流れは反資本主義運動である。マルクス主義に基づき、現代の社会問題を解決するために、労働者階級の解放を目指して連帯を呼びかけた。水俣病は、まさに資本主義の病理によって発生した公害である。加害企業チッソは、海水汚染の危険を知らながら、工場排水を垂れ流した。地域住民の命よりも自分たちの儲けを優先したのである。水俣病運動でも、全国から反資本主義運動の活動家たちが支援に駆けつけた。

もう一つの流れはマイノリティの権利運動である。黒人、女性、障害者、在日朝鮮人等、差別されてきた社会的弱者が、自分たちの権利を求めて連帯し、社会改革を目指した。水俣病患者は、まさにマイノリティであった。もし、東京湾に工場排水が流れ込んだら即刻停止されただろうと言われる。水俣の漁民を中心としたコミュニティが、地方への差別を元に犠牲にされたのである。弱い立場の人々を助けようと、こちらも多くの人々が支援に駆けつけた。

---

\* 東北大学文学部准教授

電子メール：<https://orikakom.com> の送信フォームより

こうした社会運動で難しいのは、それぞれの思想を持つ人々が党派争いを始めることだ。最初は心から被害を受けた人々を救おうと支援を始める活動家も、思想信条の違いを理由に揉め始める。誰がこの運動を仕切るのかの、ボス争いをするのだ。1960年代、多くの社会運動は党派争いによって、内部分裂し、力を失っていった。しかしながら、水俣では現在に至るまで社会運動が継続している。今も、多くの活動家、研究者、アーティストを惹きつける地域なのである。

初期の水俣病運動で、覇権を握って旗振り役となったのは、「水俣病を告発する会」であった。もちろん、すべての運動団体を統合したわけではない。特に水俣病第一次訴訟の弁護団をバックアップした、共産党系の団体とは激しく争い、完全に決裂している。それでも、全国から駆けつけた支援者を束ね、水俣病運動としての独自の思想を発展させていったグループである。

その「水俣病を告発する会」が掲げたのが「もうひとつのこの世」の実現であった。資本主義社会の打倒でも、社会改革でもない。幻のように浮かび上がる理想郷を追い求めて、社会運動を展開したのである。

では、「もうひとつのこの世」とは何であったのか。

## 2 「もうひとつのこの世」とは何か

「水俣病を告発する会」は1969年に熊本で本田啓吉を代表に結成された。本田は当時、40代半ばで高校教員であった。彼は「義勇兵」を名乗り、「義を持って助太刀いたす」というスローガンで水俣病患者の支援に乗り出した。

実質的なグループの指揮官となったのは、渡辺京二だ。渡辺は大連に生まれ、ソ連占領後に引き上げて日本に帰国した。肺結核を患い、生死を彷徨いながらも、17歳で共産黨員となった。青春の全てを党活動に捧げたと言っていいだろう。その後、スターリン批判、六全協問題で党に疑問を持ち、ハンガリー事件をきっかけに離脱した。彼は二度と社会運動にはかかわるまいと考えていた。ところが、作家の石牟礼道子に水俣病運動に誘われ、人生が激転する。

渡辺は本田の「義を持って助太刀いたす」というスローガンを気に入った。彼は社会運動に絶望していたので、悪質な企業や国家に対する抗議や糾弾、犠牲者の救援活動に心が動かなかった。なぜなら、そうした社会運動は、資本主義の暇傷を指摘し改善させる力しか持たないからだ。結果として資本主義はより良

い方向に修正され、生き延びていく。革命は絵空事だと見限っていた。それに対して、目の前の人大きな敵に立ち向かおうとするとき、加勢するというのは、政治的理念の追求ではなく、心情に動かされる行為である。渡辺は近代的な理性的な市民の社会運動ではなく、前近代的な情動的な民衆の社会運動を目指した。

情動的な民衆はどこに向かうのか。それが「もうひとつのこの世」である。

「もうひとつのこの世」の初出は、「水俣病を告発する会」の機関紙『告発』第13号（1970年6月25日）であった。ここで石牟礼道子は「もうひとつのこの世へ」という短い文章を寄せている。彼女が憂いているのは水俣病患者の魂の行末である。一つは、犠牲になった死者たちがよみがえり、「未来永劫よろばい出る」<sup>1</sup>ところである。もう一つは、水俣病患者となり、この世のものではないと自分を捉える患者の行く先である。かれらはもうこの世では救われないが、あの世にも行けない。だから「もうひとつのこの世」へ向かう道を探し、そこに患者や死者の魂をお連れしたいと石牟礼は綴る。

石牟礼の文章は文学的だが、今風の言葉にしていまえば彼女が模索するのは水俣病患者の「居場所」である。現世で苦しむ患者や亡くなった患者の魂を慰めようような場所として「もうひとつのこの世」が欲しいというのだ。

この「もうひとつのこの世」の内実については、宗教学者の萩原修子が論文「水俣病事件と「もうひとつのこの世」」<sup>2</sup>（『現代宗教』国際宗教研究所、2018年、111-132頁）で、「人間的道理」と「玄郷」の二つに分類している。萩原に倣い、この二項目で「もうひとつのこの世」の概要を見ていこう。

### （1）人間的道理

「人間的道理」とは、渡辺京二が「現実と幻のはざままで」<sup>3</sup>という文章の中で、「もうひとつのこの世」を解説するために使った用語だ。近代社会ではチッソの起こした水俣病は公害事件である。その被害の補償を求めて裁判をしなければならない。被害者は弁護士を雇い、裁判所に訴えるのである。この近代的な裁判のシステムと、水俣病の被害者の心情は全くそぐわなかった。

被害者たちにとって、水俣病はあくまでも自分たちの村で起きた事件だった。

---

<sup>1</sup> 水俣病を告発する会編（1971）、98頁。

<sup>2</sup> 萩原（2018）参照。

<sup>3</sup> 渡辺（1972）参照。

かれらの論理によれば、共同体に災いをもたらしたものは、相互扶助の精神によって、罰せられ、追放されなければならない。だから、チッソもまた、水俣病を起こした責任を問われ、なんらかの処罰を受けるべきであると考え、謝罪と補償をすべきだと考える。これが水俣病の被害者にとっての人間的道理である。それは裁判所に行っても全く理解されない非近代的な感覚であった。かれらの訴えは、弁護士同士の取引の材料にされるだけで、求めている被害者と加害者の対峙も、心からの謝罪も実現しない。

他方、村落共同体の相互扶助の論理は水俣病の被害者には届かなかった。村の人々は困窮する被害者を差別して排除した。かれらは伝染病患者であると疑われ、近隣住民から拒絶され、店で米を売ってもらえなかったこともある。それを渡辺は「人間的道理といい、ふつうの人間のつきあいといい、その理念は恐怖という社会心理によっても、あるいは単純な経済的利害によっても、きわめて容易に解体される性質のものであった<sup>4</sup>」と書く。つまり、村の論理が役に立たないからこそ、裁判に訴え出たのである。

この状況で、渡辺は裁判の枠を超えて、被害者が加害者に対面で激突することで人間的道理に基づく「もうひとつのこの世」が出現すると考えていた。渡辺は水俣病の被害者はチッソから「あいたいで血債をとりたてる立場にある<sup>5</sup>」とした。そして、「いかなる公権力も、これに口出しをすべき筋合いではない。無体をされて、死人が出た以上、人は相手の前にドスを突立てて、これで自裁するか、それとも破産してでも死を償うだけの金を目の前に積んでみせるか、どちらか択一せよと迫ることができる<sup>6</sup>」と言う。つまり、被害者は加害者に「死ぬか、金を払うかのどちらだ」と迫るのである。

その具体的な例が 1971 年から 1973 年の「自主交渉」である。川本輝夫らのグループは、第一次訴訟と並行する形で「補償協定」を求めた。これは、水俣病患者認定と同時に裁判と同等の補償金の支払いが決まる制度である。かれらはチッソの東京本社前でも座り込みをして、社屋に突入し、対面で社長との直接交渉もしている。渡辺は「水俣病を告発する会」を率いて、川本らの自主交渉の支援活動にも尽力した。

---

<sup>4</sup> 同書、173 頁。

<sup>5</sup> 同書、173 頁。

<sup>6</sup> 同書、173 頁。

彼はこう書いている。

「水俣病を告発する会」は、その患者の試行と最後まで行を共にすることを決意し、会の存続も破滅も、すべて患者を基準におく同行者集団である。その長い過程の果てには、あるいは自立した生活民の政治闘争、大衆的ではなく、少数者によるものでもあってもきらめくような生活民の政治闘争の光芒の一瞬を、夢想することができるかもしれない。会はその時碎け散ればよいのである。「もうひとつのこの世」、もしそういうものがあれば、われわれは患者・家族とともに、幻なりと垣間見たいと思っている<sup>7</sup>。

つまり、渡辺にとって社会運動の目的は、被害者が加害者に相対する中で見えてくる「人間的道理」の実現である。近代社会の成立とともに後景に押しやられた村落共同体の論理を、もう一度、人と人がぶつかり合う中で成立させていく。それは近代でも前近代でもない、新しい人と人との関係である。こうした新しい人間の共同体のあり方が実現されるのが、渡辺にとっての「もうひとつのこの世」だったのだ。

## (2) 玄郷

渡辺が「もうひとつのこの世」を社会運動で現出する人間共同体であると考えているのに対して、石牟礼の考える「もうひとつのこの世」は、人以外のものたちとも繋がりあう共同体である。彼女はそれを「玄郷」と呼んだ。

これは水俣病の被害者の心の深いところにある魂の世界である。もともと、水俣病の被害者の中でも、漁師たちは海を前にして自然の中で生きてきた。石牟礼は水俣の漁師の暮らしをこう解説する。

漁師さんたちが海に出てゆきますのに、漁獲量をあげようと思ってることもあるでしょうが、海の面に魚群が見えると心が躍って、何かこう畑をやっても鍬を投げ出して心が浮き立つということがございます。そして海に向かいながら、空を見上げると鳥たちの群もそれを見つけておりまして、大きく回っております。船の上から鳥の群を見上げながら、私の知ってる

---

<sup>7</sup> 同書、177頁。

漁師さんなどは空の鳥たちに向かって、「あの魚は吾が魚ぞ、吾が一番に見つけたぞ」と言いなさるそうでございます。その時、鳥たちも「吾が先に見つけたぞ」と同じように思っているに違いないと、その漁師のおかみさんは言われます。そういう時、海は魚の大群が動く光でいつもより拡がっているんでしょうね。そんな人間たち鳥たちとの魚を追ってゆく図はですね、今の競争社会の地獄とは違うんですね。魚たちもまあ、人間や鳥にも獲られますけれど、そこでは全くのいのち同士で、空を飛ぶことも船を漕ぐのも泳ぎ回るのも、自然態でして、いのちの賑わいのようなことではないでしょうか。お互いに全く同じような世界を感じあっているんじゃないかなあと私思うんですね<sup>8</sup>。

ここで描かれる水俣の漁師の世界では、人間は自然の中で鳥や魚と同じ場所を共有している。これを石牟礼は「いのちの賑わい」と表現している。彼女は、人とそれ以外の生きものたち、神々や妖怪が共生する幻想世界を、晩年まで繰り返し描いた。つまり、「もうひとつのこの世」とは、すべての生命が共に存在する世界なのである。

さらに、石牟礼は、水俣の漁師の生活に触れる。天気が良い日に海を行くといい調子で船が進み、「口笛一つで風を呼んで、海も空も広々と開けて、光輝く海の上で魚の群の中に入って行く<sup>9</sup>」とき、「海の上で心が晴ばれとする、その楽しさといったら何と言うか、やはりそれは極楽浄土の世界であったろうと思えますねえ<sup>10</sup>」と語っている。そして、石牟礼にとってはこの極楽浄土が「玄郷」であり、水俣病で失われたものなのである。

ここで注意しなければならないのは、石牟礼はこうした「玄郷」のような極楽浄土は、苦しみの中で生きている人だからこそ、幻視できると考えていることだ。彼女は「水俣の被害者たちは悲惨な姿もしておられますけれども、そういう人たちだけが浄土を夢みることができるというか、浄土を思い浮かべることができると思う<sup>11</sup>」とすら言う。もうこの世で生きることの先には未来が見えず、苦しみに満ちているからこそ、「もうひとつのこの世」を空想して救いを求める。

---

<sup>8</sup> 石牟礼・中村（2004）参照。

<sup>9</sup> 同書、566頁。

<sup>10</sup> 同書、566頁。

<sup>11</sup> 同書、565頁。

つまり、過去に素晴らしい海の「玄郷」があったから今生きられるのではなく、今苦しみにぬいているからこそ過去の海の記憶が「玄郷」のように素晴らしく見えてくるのだ。

そういう意味では、「もうひとつのこの世」は多くのユートピア思想とは異なっている。人間が目指して実現することのできる理想郷ではないのだ。水俣の漁師が水俣病で海の「いのちの賑わい」を失ったように、人間は自然を破壊し、文明化する中で生命が調和する世界を永遠に失ってしまった。しかしながら、「もうひとつのこの世」として、かつてあった生命が調和する世界は時おり、ここに懐かしいものとして戻ってきて、幻視される。生きている間は決してそこに自ら行くことはできないが、死後、魂となって彷徨いながら、「よろばい出る」ことができるかもしれない世界なのである。

ここまで、渡辺と石牟礼の「もうひとつのこの世」を並べて考えると、二つはあまりにもかけ離れているようにみえるかもしれない。一方は、現実的な人間関係の問題であり、社会運動で新しい共同体を作ることを目指している。他方は、空想的で人の世を離れた問題であり、死者の魂が安住できる世界を幻視している。しかし、重要なのは、どちらかではなく両方であることだ。「水俣病を告発する会」の活動では、こうした対立や矛盾に陥りそうな、相反する二つの概念や世界観、人々が不思議と一つになって行動を共にした。これは、後続の水俣病運動でも繰り返すこととなる。

では、どのように人々は「もうひとつのこの世」を幻視したのだろうか。石牟礼が文学作品の形でその様子を記録しているので見てみよう。

### 3 「もうひとつのこの世」の現出

「もうひとつのこの世」が現出する風景が最もよく描き出されているのは『苦海浄土』第二部だろう。『苦海浄土』は第一部が1969年に講談社から出版され、第二部は雑誌『辺境』に1970-1989年に連載されていたが、完結しなかった。先に第三部が1980年に出版されることになる。この間、石牟礼は第二部の執筆にずいぶん苦労し、2004年についに完結した。年を重ね、円熟期に入った石牟礼の筆が「もうひとつのこの世」の「人間的道理」と「玄郷」の二側面をよく捉えている。

この第二部は、1970年11月28日に大阪で開かれたチッソ株主総会が物語の舞台になる。この頃、株券を買って株主総会の会場に入り、そこで社長に直接、物申すという一株運動が始まったのだ。これは「水俣病を告発する会」が主導をして、全国に広がった運動である。チッソの株を一株買うだけで水俣病運動の支援になるという手軽さで、都市部に住む一般市民でも参加しやすかった。

また、水俣病の被害者たちもこの運動には乗り気だった。それまでの裁判で、弁護士や裁判官ばかりが長演説をするのに飽き飽きしていたのだ。かれらにとって、社長に直接、自分たちの怒りや悲しみをぶつけられる場は魅力的であった。そこで、揃いの白装束を縫い、鎮魂歌である「御詠歌」を練習して声を揃えて歌の練習をした。そして、いざ、当日のチッソの株主総会に、水俣病の被害者、支援者が入っていったのである。

先に「人間的道理」の側面から見ていこう。株主総会の会場は緊迫感に包まれている。最初に、ある中年男性の声掛けで人々は黙祷を捧げた。そのあと、田中義光が「チッソに毒殺された、水俣病犠牲者の霊に奉る」と鋭い一声を放つ。田中は上の娘を水俣病で亡くし、下の娘も重い障害を負った。彼のをきかけに、鈴を鳴らしながら一同は御詠歌を歌う。被害者の支援者や学生たちが感極まって「互いに肩をつかみあい身を揉んでしゃくりあげている<sup>12</sup>」。その中で、株主総会は喧騒に包まれて行った。両親を水俣病で失った浜元フミヨのとった行動を、次のように石牟礼は記述している。

えっえっというような、小さな悲鳴に似た声が左の眼前でして、人がもがくのが見えた。すわ、誰かが痙攣を起したと思った。なんと浜元フミヨさんが欄干の手すりに、もがきのぼり、立ちほだかり、一瞬わたしの目の前で仁王立ちになったのだ。咽喉笛がひきさけたかのような声をあげている。白い手甲をつけた片手がわななきながら宙を掴もうとしていた。後ろにいた市民会議や告発の男性たちが驚愕して腰に抱きつき、あやうく彼女を引きもどした。それは一瞬のできごとだった。彼女の咽喉からはなたれたその声が鈺となって天井との間に行き来した。

「両親（ふたおや）ぞお、両親あ」

ふだんゆったりしか歩けないフミヨさんが、まかり間違えば落下するに

---

<sup>12</sup> 石牟礼道子（2004f）、587頁。

ちがない階段状の欄干に立ちただかるとは、誰も思い及ばなかった。引き下されたあと、彼女の躰は、陸に揚げられた大きな魚のように、しばらくびくびく震えていた<sup>13</sup>。

水俣病の被害者の必死の訴えに対して、チッソの社長・江頭豊が応えることはなかった。被害者や支援者が会場に降りていき、社長の眼前まで行き、自分たちの想いを吐露する。浜元は位牌を社長の胸に押し付けて「親がほしい子どもの気持ちわかるか！ わかりますか」と叫んだ。会場は怒号や泣き声で騒然となっていく。川本輝夫が、隣にいた若者に「何とかして（社長に）わからせる方法はなかもんじゃろうか、わからんとじゃろうか<sup>14</sup>」と泣きながら聞いた。

残念ながら、チッソの社長は最後まで水俣病の被害者の訴えに対して、まっとうな応答をせず去っていった。それでも、被害者や支援者たちの情念は、株主総会という会社の一大イベントを圧倒することができた。この中であらわになった、水俣病の被害者の怒りや嘆きなどの情念は、近代のシステムから排除されてきたものだ。株主総会で全身全霊をかけたかれらの訴えは、「人間的道理」のひとつの表現である。加害者に対して、人として相對せよ、と呼びかけた被害者の声は、石牟礼の作品の中にも刻み込まれている。

次に「玄郷」である。水俣病の被害者は、株主総会が終わったあとに、高野山に巡礼に訪れた。亡くなった犠牲者の魂を悼むためである。石牟礼は女性たちが言葉少なに、想いに耽るところを書き留めている。そのとき、トキノがそばに寄り添い、話しかける。彼女は娘・きよ子を水俣病で亡くしていた。

あのですね、昨夜、夢見ましてねえ。蝶々がですね、舟ば連れて、後さきになってゆきよるのでございます、花びらのようでもありました。光風で、おしゅら狐が漕いでゆきよりましたがなあ、影絵でしたけど……。明神の岬から、しゅり神山のあの、おしゅらさまでした、どこにゆくつもりでしたるか。

昨日はフミヨさんの、親がほしい、親がほしいちゅうて哭きなさいましたので、わたしも貰い泣きしてしもうて、きよ子のことは言わずじまいで

---

<sup>13</sup> 同書、588-9頁。

<sup>14</sup> 同書、598頁。

したが、念の残りまして、ああいう夢見たのでしょうか<sup>15</sup>。

これはトキノの夢の話であるが、どこまでが現実で幻なのか境界線が曖昧な語りになっている。美しい風景ではあって、波のたたない不知火海の水面が鏡のように光り、そこを蝶が先導する舟がいく。それに乗っているのは、狐の神様おしゅらさまである。明神の岬は水俣にあった。海が汚れたせいか、おしゅらさまは水俣から去っていくようだ。

そのあと、トキノは舟を先導する蝶は、娘・きよ子ではないだろうかと言出す。

夢のさくらは、いや蝶々はきよ子でした。それであたに、お願いですが、文ばひとつ、チッソの人方に書いて下はりませんか。いんえ、もうチッソでなくとも、世の人方の、お一人にでもとどきますなら。

ひところでよろしゅうございます。

あの、花の時季に、いまわの娘の眸になっていただいて、花びら拾うてやっては下はりませんか。毎年、一枚でよろしゅうございます。花びらばですね。何の恨みもいわじゃった娘のねがいは、花びら一枚でございます。地面ににじりつけられて、花もかあいそうに。

花の供養に、どなたか一枚、拾うてやって下はりますよう願うております。光風の海に、ひらひらゆきますように。そう、伝えて下はりませな<sup>16</sup>。

彼女は娘の供養のために、チッソの人に手紙を書いて欲しいという。なんなら、誰でもいいから、誰かに手紙を届けてくれ、と。それどころか、桜の季節になったら花びらを一枚拾ってくれれば良いと言出す。踏みつけられ、地面に貼り付いた花びらを「かわいそうに」と言いながら、それを拾って娘のために手向けてくれと言うのだ。

彼女は夢に現れた蝶を通して、娘となにかの繋がりを感している。会えるわけでもなければ、向こうから何かのメッセージが来るわけでもない。ただ、蝶が住んでいるのは美しい世界で、海があり神様たちのいるところである。娘がいる

---

<sup>15</sup> 同書、606 頁。

<sup>16</sup> 同書、606 頁。

のは「もうひとつのこの世」だと言えるだろう。彼女はそれを幻視している。でも、そこに自分には行けないのである。現世では娘の供養を願い、美しい世界でひらひらと飛んでいくことを夢見続ける。

石牟礼の「苦海浄土」第二部は、あくまでも文学作品である。渡辺京二の証言によれば、石牟礼が描き出す社会運動の様子は驚嘆するほど正確な記憶に基づいているそうだが、幻視している世界はわからない。はたして、トキノ（のモデルとなった人物）が、本当に石牟礼の文章のようなことを語った証拠はないのである。しかしながら、「玄郷」のような世界は、本人が明瞭に語るようなものでもないだろう。幻と現実の間にあるぼんやりとした憧憬を、水俣病の被害者が持っており、それを石牟礼が具体的な像として描き出していると考えられる。それはあくまで推測にすぎない。

ただ、水俣病運動に参加する人たちに、「もうひとつのこの世」のビジョンは、「たしかにそういうものもあるかもしれない」と納得させるほど、強い説得力を持っていた。石牟礼は、このビジョンをどこから持ってきたのだろうか。

#### 4 「もうひとつのこの世」のビジョンはどこからきたのか

「もうひとつのこの世」は、石牟礼の生涯を貫く大きなテーマになっていった。彼女は天草で生まれ、幼少時代に水俣に移住してきた。子どもの頃から、正気を失った祖母の面倒をみるのが仕事だった。祖母と山に行って生き物たちや神様の話を沢山聞いた。自伝的小説「椿の海の記<sup>17</sup>」によれば、幼い頃の彼女は、自然の中で生命が調和する世界の一部になりたいと心から願っていた。しかし、自我が発達していくうちに、「個人」の人間として生きていかななくてはならないことに気づき、絶望する。石牟礼にとって「もうひとつのこの世」は、人となる前の未分化な生命体であった自己の遥かな記憶をたどることで、夢のように現れる幻想世界である。

この石牟礼自身のライフストーリーと重なりあいながら、「もうひとつのこの世」のビジョンは、いくつもの文学作品の中で形を変えて展開される。その核となるものは、水俣病運動の経験の中で形作られた。間違いなく彼女に影響を与えているものが二つある。一つ目は、「サークル村」の森崎和江らの実践から学ん

---

<sup>17</sup> 石牟礼（2013）参照。

だ「聞き書き」という方法論である。二つ目は、高群逸枝から学んだ母系制の研究である。

### (1) 「聞き書き」という方法論

「聞き書き」とは日本の社会運動の中で生まれてきたインタビューの方法である。聞き手は話し手の言葉を解釈することなく、方言も含めて話し言葉のまま記録しようとする。とにかく「そのまま残す」というのが「聞き書き」で大事にされたことだった。ただ、現在の社会学の調査のように厳密に一言一句、録音された音声を書き起こすことを目指したわけではない。目の前の人の言葉を受け取ろうとする姿勢や精神性が重視されていた。

1958年から石牟礼は筑豊の「サークル村」に参加していた。その頃、森崎和江は炭鉱で働く女性たちの「聞き書き」に努めていた。そこから学んで、水俣病の被害者の「聞き書き」を始めた。そのときに話を聞きに行ったのは、井戸端会議だった。女性の被害者や母親たちの立ち話をもとに、彼女たちの暮らしや現状を明らかにしていく。

石牟礼が最初に書いたのはルポルタージュだった。「水俣病」(初出1960年)<sup>18</sup>や、「水俣病、そのわざわいに泣く少女たち」(初出1961年)<sup>19</sup>を発表した。彼女を担当する編集者であった渡辺京二すら、長らく全ての作品は「聞き書き」に基づくルポルタージュだと思い込んでいた<sup>20</sup>。きっと水俣病の被害者の家に通い詰め、カセットテープに録音した音声やノートのメモを参考に、原稿を執筆していると思っていたのだ。ところが、彼女は録音やノートをとるどころか、ほとんど被害者の家には行っていなかった。ただ、耳に入ってくる声や、立ち話で聞いた話をもとに、かれらの世界に想像力を膨らませていったのである。本人いわく「だって、あの人が心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの<sup>21</sup>」とのことだった。

ただし、全くの空想から水俣病の被害者の世界を作り上げたわけではない。彼女は終生、水俣病の被害者に会い、かれらの世界に近づこうとその身を捧げた。

渡辺は、石牟礼は本当に水俣病患者に憑依され得たのだとする。例えば、『苦

---

<sup>18</sup> 石牟礼(2004c)参照。

<sup>19</sup> 石牟礼(2004d)参照。

<sup>20</sup> 渡辺(2013)参照。

<sup>21</sup> 同書、15頁。

海浄土』第一部の釜鶴松との出会いである。彼は年老いた漁師で、水俣病で病院に入院していた。それに対して、石牟礼は「彼はいかにもいとわしく恐ろしいものをみるように、見えない目でわたくしを見た<sup>22</sup>」と感じた。そして、こう書いている。

この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄はこの日から全部わたくしの中に移り住んだ<sup>23</sup>。

この文章を、渡辺は比喩として読むべきではないと言う。本当に釜鶴松に、乗り移られてしまい、彼の目でこの世界を見たのだと解釈する。巫女が神々や精霊の声を聞くように、彼女には水俣病の被害者の声が聞こえたのだ。だから石牟礼は「記録作家ではなく、一個の幻想的詩人<sup>24</sup>」であると、渡辺は結論づける。

つまり、石牟礼は科学の世界を生きていない。水俣病の被害者の証言を、科学的方法でいかに正しいかを示そうという意思は全くないのだ。彼女は五感で水俣病の被害者を感知し、そこからインスピレーションを得て、文学作品を書いている。その過程の中で「もうひとつのこの世」のビジョンも形成されていったのだ。

「もうひとつのこの世」のビジョンの、どの部分が石牟礼の創作で、どの部分が水俣病の被害者が持っていたものなのか。それを分けようとするのはナンセンスである。水俣病の被害者とのかかわりのなかで、石牟礼がこのビジョンを膨らませてきたという、その過程が重要である。

## (2) 母系制の研究

石牟礼が熱狂的に傾倒した女性思想家がいる。高群逸枝である。

西川祐子の論文「一つの系譜」では、平塚らいてふ(1886-1971)、高群逸枝(1894-

---

<sup>22</sup> 石牟礼 (2004e) 、106 頁。

<sup>23</sup> 同書、108 頁。

<sup>24</sup> 渡辺、同書、23 頁。

1964)、石牟礼道子(1927-2018)が日本の母性主義の系譜にあたる事が明瞭に解説されている。明治以降、日本社会は近代化の流れの中で個人の自立が重視されるようになった。その中心は都市部の中産階級の女性たちであった。多くの論者の関心は経済的自立であり、男性に支配されずに独立して生きるためには一人前の収入が必要ではないかと議論した。

その中で、平塚は一人前の収入を得ている「人間」とは男性ではないかと喝破した。すなわち、想定されている人間像には「子どもを産む」ことが想定されていない。高群は、その論点を引き継ぎ、私たちが生きていくためには、経済利益を生み出す生産活動だけではなく、生命の再生産が必要だと主張した。つまり、都市部の生産労働だけではなく、農村や漁村の第一次産業や、女性たちの出産・育児などの家事労働がなければ、人間の社会は維持できないのである。のちにこの問題はマルクス主義フェミニズムにおいて「再生産労働」として広く議論されていく。高群は、その論点をいち早く提起していたことになる。石牟礼は、この高群の思想に衝撃を受け、自分自身の思想の根幹に置いた。

もともと、石牟礼は「女性であること」に激しい葛藤を抱えていた。森崎らとの「サークル村」の活動でも、女性だけのグループ「無名通信」で活動の結成に加わった。それぞれが男性とは異なる言葉、思想を具体化しようと格闘していた。1958-9年頃のエッセイ「愛情論初稿<sup>25</sup>」では、幼少期に酒乱の父と暴力から逃げ惑う母の間で、じっとその様子を見る石牟礼の姿が書き留められている。彼女の中で、女性として生きることと、男性の暴力とは切り離せない関係だったのだ。その頃、すでに、女性たちの理想化された共同体を模索していたようで、1959年のスケッチのような文章が残っている。

私は村の入り口の銭湯で夜々みるお婆さんたちを思い出す。彼女らの裸はまったく痛ましい。四十歳年代以上の彼女らの体つきは例外なく奇型である。段々畑を肥桶荷って上り下りした天秤棒の肩コブ。前かごみの胸、ガニ股、たくましいと云うよりゆがんで座りの重くなった腰つき。重なりあった灸のあと。

彼女たちは一切合財の背中をみせあいながら、「あゝあ、お湯よりゴチソウはなかなかあ、ゴクラクじゃゴクラクじゃ」と云いながら、背中のみん

---

<sup>25</sup> 石牟礼 (2004b) 参照。

なかの背中をはぶいて<sup>26</sup>、「まんなかのとゞかんところば流しまっしゅ」と云いながら、お互いの体を流し合う。むすめの時は恋のよろこびとくるしみ、母になってからのよろこびとくるしみ、姑になってからのよろこびとくるしみ、それらの多彩な感情を何時の間にか、老いと云う淀んだ静かな沼のようなものに変えて、桶の湯を膝にかけ肩にかけ、生活の重みで傾きくたびれた腰にかけける。立ちこめる湯けむりの底の女たちは、不思議な可能性を練り上げるように背中“まんなか”をゆっくりゆっくり流しあう。彼女らは決して急がない。「三かわりにぐらいせにや這入ったごたる気のせん」と云い云いして、えんえん三時間も、「若いときゃ一晚寝れば腰の痛かぐらい治りおったばってん、痛かところは湯治ても治らん」と云い云い、ぴしゃぴしゃ湯をたっぷり含ませたタオルで腰をさするのである<sup>27</sup>。

ここでは中年以上の女性たちの裸体が丁寧に描かれる。厳しい農作業で歪み、傷ついた身体を、女性たちは湯の中で見せ合い、いたわりあう。そこには娘、母、姑になっていく女性たちの世代間の繋がりが示唆される。原風景の時点で、石牟礼にとって女性たちの時系列的な、縦の繋がりは明示的であった。

彼女にとって重要なのは水俣という郷土で生きる女性たちである。決して楽な生活ではないが、その中に小さな喜びや楽しみを見出していく。その象徴として、ここでは銭湯で垣間見える暖かなケア関係が提起されている。生活苦の中だからこそ見えてくる幸せな風景を切り取っているのである。

それは、高群が農村女性の共同体に理想郷を見出したことに似通っている。西川によれば、高群は「貨幣経済と賃銀労働の浸透がないため労働の場と家庭が分離されておらず、また孤立した家庭ではなく、共同体として生きる農村の生活、もしくは時代をさかのぼって古代の母系氏族社会をモデルにとって、自由連合の社会を描き、そこでしか花咲かない<sup>28</sup>」と述べた。この主張は農村の女性たちの貧困や苦しみの現実を知らず、美化して礼賛しているとして痛烈に批判された。しかし、西川によれば「高群は農村の現実より他のどこへも行くことのできぬ者たちのために、救いの論理を組み立て、絶望的な状況を「美」に倒立させて

---

<sup>26</sup> 原文ママ

<sup>27</sup> 石牟礼 (2004a)、53 頁。

<sup>28</sup> 西川 (1985)、178 頁。

ユートピアを描くことを行なった<sup>29</sup>」のだった。

高群と石牟礼に通底するのは、変えられない現実の苦しみを前にした時、そこにある（はずの）共同体を幻視することである。石牟礼が類似の発想をする高群の著作に興奮し、理論的支柱を得たと確信したのもよくわかる。彼女は、自分が幻視していたいたわりあう女性たちの縦の繋がりを、母系制度であると理解したのだ。今は失われた古代の「妣たちの共同体」こそが、女性たちのあるべき姿だったのだ。そして、もうそれは戻ってこない。理想郷が永遠に失われた世界で、自分たちを生み出した「妣たち」を懐かしく思いながら、女性たちは繋がりにあつて生きていくのである。このときの「妣」とはもはや現実的な「母親」ではなく、理念型として女性性である。

これは、「もうひとつのこの世」の論理とほぼ同じである。苦痛に満ちた現実を前にして、幻視される世界を追求している。石牟礼は高群の著作を学びながら、論理を転用して「もうひとつのこの世」を形成していったのだろう。

## 5 「もうひとつのこの世」と社会運動

「水俣病を告発する会」の運動で「もうひとつのこの世」は実効的なビジョンとして機能していた。このグループの活動資金を集めたのは機関紙『告発』である。定価は三十円。しかし、ほとんどは無料配布し、代わりにカンパを募った。部数は発行から一年で一万部を超えていく。最盛期は二万部に迫る勢いだった。渡辺によると、活動していた四年半に「一億円以上集まった<sup>30</sup>」という。その中核にあったのが石牟礼の思想であり、「もうひとつのこの世」のビジョンだった。

これだけ見れば、「水俣病を告発する会」の活動は大成功だった。潤沢に資金を集め、一株運動や自主交渉のような独自の運動を展開した。それを牽引したのは「もうひとつのこの世」という不思議なビジョンだというのは夢がある。こうした運動をモデル化し、応用できないだろうか。

実際に「水俣病を告発する会」に参加した若い学生の手記は、運動に参加することの興奮と喜びに満ちている。彼は学生生活を投げ打って運動に打ち込み、

---

<sup>29</sup> 同書、178頁。

<sup>30</sup> 米本（2017）、157頁。

「不断に働く自分<sup>31</sup>」というものがあり、「自分がその相手へとメタメタにのめりこんでいく<sup>32</sup>」結果、水俣のためにビラを印刷して撒き、ゼッケンをつけて街に立ち、患者さんの家に行き肩を叩く。そうした学生の献身的な働きに対して、水俣病の被害者・牛島直も応える。

わしはここに来るとる者は全部、馬鹿ばかりじゃと思う。わしがこう言うたからて腹かかんごつしてはいよ。なぜかならば、ほんにあん遠かところからわざわざ裁判ば見に来たり、名前も知らんて手紙もやらず、カンパばやらず。水俣んごたところまできて手伝いはさす。これを馬鹿ち言うか利口ちゅうか考えてみればすぐわかる。ばってんですな、わしは馬鹿が好く。世の中は利口と馬鹿とおるがわしゃほんに馬鹿が好くな<sup>33</sup>。

「水俣病を告発する会」は、若者たちが情動に任せて水俣病の被害者たちに深い同情を抱き、損得計算のない純真な支援に赴いた。これは理想的な支援とも言えるかもしれない。被害者と支援者がともに感謝し合う幸福な関係である。これは渡辺たち、活動家のグループ運営の手腕が発揮されたと言えるのではないか。一つの社会運動モデルにできるかもしれない、とすら思う。

しかしながら、現実的には渡辺は「水俣病を告発する会」を離脱する。その後石牟礼との創作関係は続くが、二度と水俣病運動には近づかなかった。それどころか、長い間、口をつぐんで「何があったのか」を語らなかった。禁句だったのだ。1990年の講演「水俣から訴えられたこと<sup>34</sup>」で初めて総括をしようと試みるが、やはり詳細には踏み込んでいない。晩年になり、インタビューや対談でポツポツと昔話をし、当時の様子が垣間見られるようになった。

そして、近年、渡辺、石牟礼の日記が雑誌『アルテリ』で公開され始めた。これで、ようやく「水俣病を告発する会」の舞台裏がわかってきた。

まず、目に飛び込んでくるのは渡辺の痛々しい日記の文章である。1970年11月5日、まだ活動を初めてまもない頃、渡辺は早くグループから離脱したいと考えていた。「水俣病を告発する会」の人の配置を考え、実務体制を整えていこ

---

<sup>31</sup> 守田（1972）、152頁

<sup>32</sup> 同書、152頁

<sup>33</sup> 同書、152頁

<sup>34</sup> 渡辺（2017）参照。

うと考える中でのことである。

私も今はただひたすら会から手を引きたい一念だ。もともと形をつくりあげることが私のうけおった仕事だった。それはとっくに完了した。今月末大阪へは行くまいと思う。会については、財政、「告発」の配本体制という実務の面だけをひきうけて行けばいい。本田氏が仕事をしやすいようなサポートして行く責任だけは残っているのだから。私にとって「告発する会」は終わった<sup>35</sup>。

文中にある「大阪」というのは、11月28日の大阪でのチッソ株主総会のことである。この頃、一株運動は一気に盛り上がりを見せ、「水俣病を告発する会」にも注目が集まり始めていたはずだ。その最中、すでに渡辺はひたすらやめたいと日記に書いていた。

翌年の1971年8月になると、渡辺の絶望はさらに深くなっていく。自分が思い描いていた「もうひとつのこの世」の実現などできず、水俣病運動は陳情運動の範囲で終わるだろうと予測している。「うらみをはらす闘いなどどこにあるというのか<sup>36</sup>」と書きつけ、「幻を一瞬たりとも現実化する途はもはや閉ざされている<sup>37</sup>」と結論づけた。彼はしきりに自分の性分に社会運動は合わないのだという。さらに自分の感情をこう吐露する。

ひそやかに生きたい。この数年、グループの中で何かの精神的権威でもあるかのように見なされ、若い人たちにあれこれ指図するかのような立場におかれて来ながら、私はそういう自分を終始こっけいなものに思い続けて来た。私がカリスマ的存在などであるはずがないし、指導者であることさえおかしい。私はそんなものではない。私は一生書生であったにすぎぬし、これからもそうであるのだ<sup>38</sup>。

この頃、川本輝夫らの自主交渉が始まり、「水俣病を告発する会」はますます水

---

<sup>35</sup> 渡辺（2021）、49-50頁。

<sup>36</sup> 渡辺（2022a）、53頁。

<sup>37</sup> 同書、54頁。

<sup>38</sup> 同書、55頁。

侯病運動で重要な役割を果たすようになる。社会運動史に残る闘争だったのだ。その躍進を実現したのだから、渡辺は優れた社会運動の戦略家であり、信頼の厚い指揮官だったのだろう。同年の10月14日は、会の人員配置を改めて書き出し、「全体として層の厚みが一そうましたように思われる<sup>39</sup>」と満足げだ。その後も運動の細々としたことや金策に走っていたことが伺える。裁判の途中から共産党系の弁護団と対立し始め、ほかの支援団体との調整にも追われた。第一次訴訟の判決まで、被害者サイドの当事者、司法関係者、支援者が、表面的にも連帯して走り切るのは至難の業だったはずだ。渡辺がグループのために身を粉にして尽くしたことは間違いない。他方、本人はひたすら「やめたい」と繰り返し、傷つき、ボロボロになっていく。

否定するのは自分のことだけではない。自主交渉の中で、水俣病の被害者に対しても、渡辺は苛立ち始める。1973年1月28日には「川本氏への嫌悪感と失望、みな同意見なり。水俣病のこと、終わった感深し<sup>40</sup>」と切り捨てるように書く。また交渉中の患者に対しても、これではダメだと憤り続ける。「訴訟派の患者の自己中心、わが勝手はまったく目にあまる<sup>41</sup>」といい、女性たちには「情念ぬたくり主義のどうしようもなさ<sup>42</sup>」「まったく女としかいいようのないエゴイズム<sup>43</sup>」とひどい言い草だ。

さらに1973年8月21日は、水俣病運動の仲間である男性たちに、辛辣な言葉を並べている。

水俣病とかかわったおかげで、実に不愉快な馬鹿どもと知り合った。運動などやる人間の五〇%強が病的で、うぬぼれが強い、品性劣悪な連中であるのはいったいどういうわけか。さっぱりして男らしい奴はめったにお目にかかれない。名声乞食どもめ。この四年間にいやいやながら辛棒して来たつき合いをきれいにさっぱり断ち切ってやる<sup>44</sup>。

これを渡辺の本音であると思なす必要はないだろう。人は日記帳を前にすると、

---

<sup>39</sup> 同書、58頁。

<sup>40</sup> 渡辺（2022b）、85頁。

<sup>41</sup> 同書、102頁。

<sup>42</sup> 同書、102頁。

<sup>43</sup> 同書、102頁。

<sup>44</sup> 渡辺（2023）、69頁。

過剰に感情的になり、怒りや悲しみを爆発させながら書いてしまうものだ。運動の中で誰にも言えない想いを、自己セラピー的にここで発散させていたのだろう。

逆に言えば、渡辺は水俣病運動への攻撃を避けるために沈黙したとも考えられる。特に、水俣病の被害者に対する悪罵は、本人たちに浴びせるつもりはなかったのではないか。社会運動の中で当事者は疲弊し、傷つき、心の余裕をなくしていく。時にはワガママな行動にも出る。かれらのそのプロセスは、目の前で見ていた渡辺が一番よくわかっていただろう。

この末路は社会運動の宿命だと言っていい。最初に、当事者が精神的に追い詰められて崩れていく。それに巻き込まれて、支援者も平常心を失う。疲れ切った運動体の人々のなかに亀裂が走り、対立が深まり、グループは崩壊していく。

渡辺の沈黙は水俣病運動の「成功譚」や「美談」を台無しにしないための配慮だったのではないか。第一次訴訟後、渡辺の水俣病運動との関係は「石牟礼道子の世話係」という一点でのみでつながっていく。そして、塾や予備校で講師をしながら、歴史家として著述業に専念していった。

1970年10月29日の日記で渡辺はこう書いている。

告発する会の仕事から逃亡することはできない。男らしくそれを背負いこむこと。今の仕事の最も実務的な最も基底的部分をしっかりと背負うこと。誰にもこの任務を期待するな。政治とか運動とか集団の維持はたえるべき運命なのだ。それに関わった以上たえることだけが残るのだ。そう考えれば何ほどのことがあるだろうか。徹底的に期待せざる単独者として事に処せばよい<sup>45</sup>。

渡辺の言葉は悲壮ではあるが、ナルシシスティックでもある。ここで「男らしく」という言葉が出てくるが、彼は性別二項対立的な男性性のあり方に強くこだわっていた。実は、50年近く経った後、晩年になって渡辺は当時を懐かしく振り返り、こんなふうに言っている。

(前略) 僕は男性との関係が難しいんだな。水俣病を告発する会は男性同

---

<sup>45</sup> 渡辺 (2021)、49頁。

士の同性愛的な集団だったような気がする。女性が入り込めないようなね。一緒に死ぬぞという、例えば塹壕戦をともに戦った戦友愛みたいね。告発する会はそういう戦友愛みたいなものが強かったと思う<sup>46</sup>。

さらに「「告発する会」が一番良い仲間だったと思っている<sup>47</sup>」と言いながら、結局は運動の中で会議をして、意見が異なる相手を「バカとかクソとか言って、やっつける<sup>48</sup>」から結果的に関係は崩れていくということ語っている。男性の結びつきが強い運動であったからこそ、男性との関係は脆いのだというアンビバレンスがあったのだ。

それに対して、石牟礼は「水俣病を告発する会」の男性たちの人間関係には冷めた視線を送っている。1969年9月4日、初期の運動の段階で日記にこう綴っている。

運動は順調に行っているのであろう。水俣も、熊本も。ぜんぜん、よろこびが感ぜられない。渡辺さんは新しい質の集団が出来るとおもいますかという。出来るでしょうと答え、それはできるにちがいない<sup>49</sup>。

石牟礼は、渡辺が運動に絶望し始める前から、すでに「水俣病を告発する会」に対して氷のように冷たい言葉を吐く。彼が意欲的に創造していこうとする新しい人間の共同体、彼にとっての「もうひとつのこの世」の構想に対し、「できるにちがいない」と言いながら、それにはなんの期待も興奮もない。彼女は「私はずいぶん鈍感なのだろう<sup>50</sup>」「そのようなことは、私の本質はかかわりない<sup>51</sup>」と切り捨てる。

人を集めるにはキライではないが、水俣病を「義によって助太刀いたす」というのは男は論理なのだろう。

女には、わたしにはたてまえはない。本能で（原始的なチエといういべ

---

<sup>46</sup> 渡辺（2020）、193頁。

<sup>47</sup> 同書、247頁。

<sup>48</sup> 同書、247頁。

<sup>49</sup> 石牟礼（2022）、39頁。

<sup>50</sup> 同書、39頁。

<sup>51</sup> 同書、39頁。

きか。) 苦しいから動いて、ひとをよびよせるのである<sup>52</sup>。

さらに、渡辺に対しては「この人はかわいそうな人だ。ヒロイズムと才能は、ことにすぐれた男性の場合は不可分なのであろうか。であれば、生理的に受けつけられないのだが。それは彼にとっては、不幸の表現かもしれない<sup>53</sup>」と評する。彼女はあんなに渡辺がこだわっていた男性性、男性同士の絆に対して一貫して距離を置き、分析的に見ている。1970年1月20日にはこう書く。

男の論理はご愛嬌なところがある。自己顕示欲と集団は切っても切れない間がらだから。このごろそれを肯定する。弘先生も、三原さんも、それが歴史を動かすエネルギーだと云ったっけ。すると女の論理とは何だろう。論理はちっともわからないが、情念の純一なことはわかる。そして女の情念は集団に作用する力をもっていることも<sup>54</sup>。

おそらく、石牟礼は「水俣病を告発する会」に参加する中で、男性たちが揉め、相手を罵倒し合うのを何度も目の当たりにしているはずだ。彼女は直感的に、この男性の論理が集団を解体する方向に導く一方で、女性たちの情念が集団を凝集する力を持っていることを理解している。たしかに、今から見れば、論理ではなく情念が「水俣病を告発する会」を後押ししていたのだが、運動の渦中でよく気付いたものだと思う。彼女は、社会運動理論はなに一つ知らなかったが、社会運動のダイナミズムを見抜く活動家の天与の才を持っていた。

他方、石牟礼は「このごろ急に、男たちの幼児性と、やさしさがわかるようになった<sup>55</sup>」「なんでもわかってしまう。かなしいが、わかってしまうものだからしかたがない<sup>56</sup>」と書く。彼女の活動家の才は、情緒の世界に溶け込んでしまうのだ。男性たちの運動の方針に提言するのでもなく、舵取りをとって変わろうとするのでもなく、ただ「かなしい」と日記に書いて終わる。そして、死の近い予感がしきりにする<sup>57</sup>」と希死念慮に悩まされる日々が続くだけだった。

<sup>52</sup> 同書、39頁。

<sup>53</sup> 同書、38頁。

<sup>54</sup> 石牟礼(2023)、42頁。

<sup>55</sup> 石牟礼、同書、42頁。

<sup>56</sup> 石牟礼、同書、42頁。

<sup>57</sup> 石牟礼、同書、42頁。

同年、2月19日は珍しく散歩に出る。早春の暖かな日なのだろうか。日記の筆致は生き生きして「万葉の乙女の気分にかえる。久しぶりに唄う気分。生命のかなしさよ。生も、死も、吹く風のいとなみ<sup>58</sup>」と高揚している。そしていくつかの短詩を書いているので、ひとつ紹介しよう。

まぼろしのごとき芝野  
をゆけるなり  
いのちのうちなる  
春のかぐわし<sup>59</sup>

石牟礼の心は遠くの世界、生命の調和する世界へ飛翔しようとしている。地に足のつかないふわふわとした詩のなかで、彼女が一刻、やすらいでいるのがわかる。

決して社会運動に向いているタイプではない。現実を直視すると苦しくて、幻想的な詩の世界に飛び立ってしまう。彼女の望みは死んで「もうひとつのこの世」にまろび出ることだった。なのに、世俗の活動家としての才覚はあるのだ。いつも一人の人間が分裂している。

石牟礼道子がすごいのは、この詩人の感性のままに水俣病運動のど真ん中に居続けたことである。仕事場を熊本に移したものの、精力的に文筆活動に励み、水俣病について書き続けた。精神的にはいつも不安定で「死にたい」と繰り返しながら、周囲に励まされながら90歳まで生きた。そして、形を変えながら「もうひとつのこの世」のビジョンを創出し、水俣病運動の思想的牽引者であり続けたのである。

## 6 おわりに

1973年3月20日、熊本地裁で水俣病第一次訴訟の判決が出た。裁判は全面勝訴に終わった。7月9日には川本輝夫らの自主交渉派が要求していた補償協定も調印された。「水俣病を告発する会」が中心となって支援した水俣病運動は大成功に終わったと言って良いだろう。しかしながら、渡辺は失意の中、「水俣病

---

<sup>58</sup> 石牟礼、同書、48頁。

<sup>59</sup> 石牟礼、同書、49頁。

を告発する会」を去った。

その後、「もうひとつのこの世」のビジョンは若者たちによって引き継がれていく。「水俣病センター相思社」の創設だ。

裁判後も、水俣病の被害者たちは地域社会で生きていかななくてはならない。しかし、勝訴後も、住民の多くはチッソを支持していた。たとえ、公害の責任が明らかになったとしても、地元の人々にとってチッソは安定して働ける大事な会社であり、街の繁栄の象徴でもあったのだ。その状況では、水俣病の被害者は周囲から孤立し、暮らしがままならないのではないかという不安があった。

そこで生活支援の拠点の設立の必要性が1971年頃から、水俣の支援団体間で議論され始めた。しかしながら、生活支援となるとそこに関わる人々は20年、30年と水俣病の被害者たちと付き合い、支えていかななくてはならない。また、設備を作るためにも多額の資金が必要だ。具体的な話はなかなか進まなかった。

その大事業を牽引するビジョンとして再び登場したのが「もうひとつのこの世」である。1972年10月15日に「水俣病センター（仮称）をつくるために」の中ではこのような一段がある。

「なんとか励まし合っていきたい」

「気楽に集まれるような場所があれば・・・」

患者や家族や支援者たちのこのような願いは、早くからそれぞれに呟かれていたのです。もし、水俣に患者・家族からの集会所ができ上るならば、それは、今の認定患者にとどまらず、今後続出する幾千幾万の患者さんの集まる「場」となることができると考えます。それは明らかに、加害者の横暴と専制をつきくずす水俣病のたたかひの根拠地となり、また、本来の海と大地に糧を得る生活を自分自身の手にとりもどす（もうひとつのこの世）をつくる場所となるにちがいありません<sup>60</sup>。

ここに出てくる「もうひとつのこの世」のビジョンは闘争拠点であり、生命の調和する世界であるという、両論を踏まえて転用されている。つまり、これまでは幻視してきた「もうひとつのこの世」を実現するための具体的な生活の場として、「センター」は構想された。

<sup>60</sup> 水俣病センター相思社編（2004）、380頁。

そもそも、「水俣病を告発する会」時代に、石牟礼は「もうひとつのこの世」を現世では実現不能なものとして提起した。他方、このビジョンは後続の運動の中で形を変えて転がり始める。しかも、今度の担い手は、渡辺や石牟礼ではなく、当時は無名の若者たちだった。

「水俣病センター相思社」が1974年に運営をスタートする。運営部の世話人として柳田耕一が選出された。水俣病運動に参加していた24歳の青年である。しかしながら、建物が立っても活動内容は何も決まっていなかった。明日から何をすればいいのか。スタッフの給料はいくらなのか。何もかも手探りで試行錯誤の日々だった。

そんな水俣病センター相思社の活動も、2024年に五十周年を迎えた。白紙状態で放り出された事業だったが、若者たちは水俣病被害者の裁判支援をしながら、農業や漁業の支援、地道な聞き書き、柑橘類の販売など、多くの企画を実現させていった。また、都市部に住む若者たちを集めて「水俣生活学校」を開催し、地元で自給自足の生活をしながら、社会問題について考える場が作られた。現在も、水俣病センター相思社では、職員が地域で暮らしながら、水俣病の被害者の支援、啓発、記録などの活動を続けている。

しかしながら、今はもう水俣病センター相思社が、「もうひとつのこの世」を自分たちが実現する活動のビジョンとして掲げることはなくなった。もっと地に足のついた現実的な活動が主になっている。では、この不思議なスピリチュアリティが漂う、水俣病運動のビジョンは消えてしまったのだろうか。

そんなことはない。水俣では、再び、新しいビジョンが生まれてくる。それを目にするには1990年代の到来を待たねばならない。

## 文献一覧

石牟礼道子 (2004a) 「いとしさの行方」『石牟礼道子全集 不知火』第1巻、藤原書店、51-53頁。

石牟礼道子 (2004b) 「愛情論初稿」『石牟礼道子全集 不知火』第1巻、藤原書店、60-83頁。

石牟礼道子 (2004c) 「水俣病」『石牟礼道子全集 不知火』第1巻、藤原書店、146-

159 頁。

石牟礼道子 (2004d) 「水俣病、そのわざわいに泣く少女たち」『石牟礼道子全集 不知火』第 1 卷、藤原書店、164-174 頁。

石牟礼道子 (2004e) 「苦海浄土」第一部『石牟礼道子全集 不知火』第 2 卷、藤原書店、7-261 頁。

石牟礼道子 (2004f) 「苦海浄土」第二部『石牟礼道子全集 不知火』第 2 卷、藤原書店、263-607 頁。

石牟礼道子・中村了権 (2004) 『『苦海浄土』をめぐって』『石牟礼道子全集 不知火』第 3 卷、藤原書店、565-566 頁。

石牟礼道子 (2013) 『椿の海の記録』河出文庫

石牟礼道子 「日録 4」(2022) 『アルテリ』第 14 号、24-41 頁。

石牟礼道子 「日録 8」(2023) 『アルテリ』第 16 号、40-49 頁。

西川祐子 「一つの系譜」(1985) 『母性を問う 歴史期的変遷』下巻、人文書院、158-191 頁。

萩原修子 (2018) 「水俣病事件と「もうひとつのこの世」」『現代宗教』国際宗教研究所、111-132 頁。

水俣病センター相思社編 (2004) 『もう一つのこの世を目指して 水俣病センター相思社 30 年の記録』水俣病センター相思社

水俣病を告発する会編 (1971) 『縮刷版「告発」』水俣病センター相思社

守田隆志 「水俣病闘争における支援とは何か」(1972) 石牟礼道子編『水俣病闘争 わが死民』現代評論社

米本浩二 (2017) 『評伝 石牟礼道子 渚に立つ人』新潮社

米本浩二 (2022) 『水俣病闘争史』河出書房新社

渡辺京二 (1972) 「現実と幻のはざままで」『水俣病闘争 わが死民』現代評論社、168-178 頁。

渡辺京二 (2013) 「『苦海浄土』の世界」『もうひとつのこの世 石牟礼道子の宇宙』弦書房、8-33 頁。

渡辺京二 (2017) 「水俣から訴えられたこと」『死民と日常 私の水俣病闘争』弦書房、164-247 頁。

渡辺京二 (2020) 『幻のえにし 渡辺京二発言集』弦書房

渡辺京二 (2021) 「日記抄 1」『アルテリ』第 12 号、46-59 頁。

渡辺京二 (2022a) 「日記抄 2」『アルテリ』第 13 号、46-62 頁。

渡辺京二 (2022b) 「日記抄 3」『アルテリ』第 14 号、82-105 頁。

渡辺京二 (2023) 「日記抄 4」『アルテリ』第 15 号、54-71 頁。

---

<sup>i</sup> 正確には東京で交渉をしていた、川本輝夫・田上義春らの交渉団である。詳しくは米本 (2022) を参照。